

発達障がい児者のきょうだいと母親の役割期待に対する認知の比較ⁱ

西山春菜ⁱⁱ・重橋のぞみ

Comparison of the recognition for the expectation about role between siblings and mothers of developmentally disorders

Haruna Nishiyama・Nozomi Jyubashi

【問題と目的】

柳澤 (2007) は、障がい児者と暮らす兄弟姉妹 (障がいのある同胞を持つ兄弟姉妹: 以下、きょうだい) にとって、障がい児者 (きょうだいにとっての同胞: 以下、同胞) と接する機会や時間は両親と同じくらい多いことを指摘している。同胞と暮らすきょうだい達は、親と同じもしくはそれ以上に同胞と生活を共有する時間が長くなる存在である。

きょうだいに関する研究は、当事者同士の活動を通じた支援に関するもの (阿部・神名, 2015、三橋・吉岡, 2014)、子育てをする親としての困難感を取り上げたもの (金泉ら, 2015、水内・片岡, 2015、阿部・神名, 2011)、きょうだい自身による振り返り (小笠・黒澤, 2014、水内・片岡, 2015、圓尾ら, 2010) などが行われてきた。大瀧 (2011) は、きょうだいに関する研究を概観し、きょうだい自身の体験や存在に目が向けられるようになってきたことを指摘している。また、きょうだいが経験する感情について、きょうだいが抱えるに至ったアンビバレントな感情を様々な視点から多面的に捉えることの必要性を示唆している。

きょうだいは、同胞の存在により親の関心が同胞に向きやすいこと、それによって寂しさや不満、孤独感、同胞と親の愛情をめぐる張り合うことに罪悪感を抱くなど、否定的な影響を受けると指摘されている (McHale, 1986)。遠矢 (2009) は、きょうだいについて共依存や機能不全家族で育ったという意味でのアダルトチルドレンの概念を参照できるとし、きょうだいは多くの場合、不満や葛藤、ストレスなどを抱きやすいことを示した。このように、きょうだい自身も支援が必要な当事者であることが指摘され、きょうだいを対象とした研究は年々増加している。

多岐に渡るきょうだい研究の中でも近年、きょうだいの担う役割に関する研究が注目されている。きょうだいは同胞の存在から様々な影響を受け役割を取得し (柳澤, 2007)、親もまたきょうだいに「こうであってほしい」

という役割期待を行うため、きょうだいは葛藤を抱えやすいことが示されている (大瀧, 2011、吉川, 2001)。きょうだいは「自分が母親からある特定の役割を担うことを期待されている」と認知していることがあり (吉川, 2001、笠田, 2013)、母親・きょうだいそれぞれがきょうだいの担う役割に対する認知を持っているといえる。

ところで、きょうだいの役割研究は、「きょうだいから母親に対する役割の認知」「母親からきょうだいへの役割の期待」のように、一方向的に検討したものがほとんどであり、きょうだい・母親が持つ双方向の役割認知について検討したものはみられない。しかし、きょうだいが「母親はきょうだいである自分にこのような期待をしているだろう」と思っている期待の認知は、実際の母親の期待とずれはないのだろうか。そこで本研究では、きょうだいと母親の「きょうだいの役割期待の認知」を明らかにする。これにより、きょうだいと母親の役割期待の認知にはどのような特徴があるのかを明確にすることができると考える。

障がいのある同胞を持つきょうだいとその母親の役割期待の認知について検討することで、同胞の存在により様々な影響を受け、心理的な葛藤を抱える可能性があると考えられるきょうだい自身に対する支援の手がかりが得られると考える。

【仮説】きょうだいと母親の役割期待認知の仕方にはずれがあるだろう。

【方法】

調査協力者 A 県立特別支援学校 A 学園卒業生親の会に在籍する母親40名、その子どもで障がいのある同胞を持つきょうだい23名に質問紙調査を依頼した。

調査時期 2017年4月下旬から6月中旬に実施した。

手続き 母親に対しては、A 県立特別支援学校 A 学園卒業生親の会の年次総会に筆者が参加し、出席者に対して質問紙を配布、回答後その場で回収した。欠席者には、総会資料とともに質問紙を同封した封筒を自宅へ郵送、

i 本論文は、2017年福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻修士論文を加筆修正したものである。

ii 元福岡女学院大学人文科学研究科臨床心理学専攻大学院生

後日返信用封筒にて回収した。きょうだいに対しては、同総会にて研究の主旨を理解し、自身のこども（きょうだい）に調査依頼用紙を配布することに同意した母親に依頼用紙を渡した。

倫理的配慮 本研究は、本学倫理委員会の審査にて承認を得て行った。回答は無記名であり回答は自由意志であること、回答しないことで不利益が生じないこと、研究以外の目的で使用されることがないことを質問紙に明記し、手渡しの場合は口頭にて説明を行った。特にきょうだいに関しては、18歳以上を対象とし、調査協力に対して自己決定・自己判断できる人物であることを配慮した。このように研究内容を十分に説明した上で、同意を得た協力者のみに調査を依頼した。

親子のペアリングは調査用紙に番号をつけることで設定したが、親子ペアを同定しても個人は特定できないこと、個人情報の取り扱いに注意すること等を留意し、説明した。また、質問紙作成に際しては、障がいのある同胞を持つきょうだい、および母親に協力を得て確認を行い、協力者の負担にならない質問量、内容の適切性を事前調査にて精査した。

質問紙の構成 質問紙は、(1) フェイスシート、(2) 母親およびきょうだいの役割期待認知質問項目、(3) きょうだいの主体的役割取得認知質問項目、(4) 役割期待の自由記述で構成される。なお、親子のペアリングを行うため、質問紙に数字のペアナンバリングを行った。

(1) **フェイスシート** 母親にフェイスシート記入を求めた。項目は、子ども（同胞）の障がい種別、きょうだいの有無、きょうだいがいる場合はきょうだいの人数ときょうだいと同胞の年齢差、きょうだいと同胞の関係性を尋ねた。なお、きょうだいが複数いる場合は、最も年齢が高いきょうだいについて回答を求めた。

(2) **母親およびきょうだいの役割期待認知尺度** 谷川(2009)が作成した「きょうだいの家族・同胞に対する影響・意識尺度」、春日・宇都宮(2011)の「親からの期待に関する質問項目」、笠田(2013)・圓尾ら(2010)の「きょうだいの語りから得られた役割に関する発言」をもとに、項目を選定し「母親およびきょうだいの役割期待認知尺度」を作成した。項目の選定は、筆者および大学院専攻の大学院生複数で協議を行った。

なお、「母親がきょうだいに求める役割期待認知（以下、母親の役割認知）」の主語と語尾を変更し、「きょうだいが認知する母親の役割期待尺度（以下、きょうだいの役割認知）」を作成した。例えば、「人を外見で判断しない人になってほしい」は『人を外見で判断しない人になってほしい』と思っているだろう」とした。合計32項目について、「非常に当てはまる」から「全く当てはまらない」までの5件法での回答を求めた。

(3) **母親およびきょうだいの主体的役割取得認知尺度** 親から期待された役割だけでなく、きょうだいが主体

的に役割を取得する場合もあると考え、主体的役割取得を尋ねる項目も設定した（以下、母親（およびきょうだい）の主体的役割取得）。上記（2）の各カテゴリーから1項目ずつ抽出し、例えば「自然に『同胞を支えたい』と思うようになってほしい」と思っているだろう」など、主体的な役割取得の表現に変えた8項目（主体的役割期待）を作成した。

(4) **自由記述** 質問項目以外の役割期待について回答を求めた。

【結果】

1) **回答者の基本情報** 質問紙の回収数は、母親が40部(31%)、きょうだいが23部(18%)。回答者の基本情報を表1に示す。

表1 回答者の基本情報

質問内容	回答分類	回答数
同胞の障害種別	知的障害/精神遅滞	37
	自閉症スペクトラム	10
	注意欠陥多動性障害	3
	学習障害	4
	未記入	1
きょうだいの有無	いる	33
	いない	6
同胞の障害の重複	未記入	1
	診断：単一	27
	診断：複数	12
きょうだいの数	未記入	1
	一人	17
	二人	14
	三人以上	3
同胞ときょうだいの関係	兄	15
	弟	15
	姉	14
	妹	10

2) **母親およびきょうだいの役割期待認知尺度の因子分析結果** 母親の役割期待(32項目)の回答に重みづけのない最小二乗法による因子分析を行った。スクリープロットの固有値および解釈可能性などから、4因子解が妥当であると考えられた。4因子を仮定して因子分析(バリマックス回転)を行い、因子負荷量0.35以上を基準に因子分析を繰り返した。因子負荷量0.35未満の項目および複数の因子に負荷量が高い項目11項目を除外した最終的な因子パターン(19項目)を表2に示す。

第1因子は、「人に優しくしてほしい」など、人としての在り方に関する項目で構成されており、「人間性因子」と命名した。第2因子は、「困ったときには同胞を経済的に援助してほしい」など、具体的・現実的な同胞や家族へのサポートに関する項目で構成されており、「家族への援助因子」と命名した。第3因子は、「いい高校・大学に行ってほしい」など、学業や進路選択に関する項目で構成されており、「進路・就職因子」と命名した。

表2 役割期待に関する質問項目の因子分析の結果 (N=34) 及び役割期待認知得点に親子間で差があった項目

項目	F1	F2	F3	F4	親の役割期待得点から子の得点を引いた値が3以上の項目を抽出	
					親の役割期待大	子の役割期待大
『人間性』 α=.863						
2 人を外見で判断しない人になってほしい	.833	-.117	-.008	.004	+	
25 良い伴侶を見つけてほしい	.758	.005	.072	.190		
34 自分のことは自分で責任を持ってほしい	.755	-.036	.218	.185		
37 人に優しくしてほしい	.746	-.030	.082	.098		
21 思いやりを持ってほしい	.654	-.098	.173	-.013		
4 自分の満足のいく生き方をしてほしい	.600	-.017	-.023	.033		
『家族への援助』 α=.818						
16 結婚しても親や同胞の近くに住んでほしい	.038	.908	-.071	-.084	+	-
29 地元で就職したいと思っ	-.023	.833	.140	-.094		
26 進路選択や職業選択の際には、同胞のことも考えてほしい	-.320	.682	.276	.036		
3 同胞にとっての親代わりという役割(面倒をみるなど)を担ってほしい	-.123	.518	-.142	-.178		
38 困ったときには同胞を経済的援助に援助してほしい	-.001	.514	-.137	.063		
40 親の言う事をきいてほしい	-.006	.452	.256	.245		
『進路・就職』 α=.842						
6 いい高校・大学に行ってほしい	.045	-.050	.851	.020	+	
11 いい企業に就職してほしい	.007	.036	.836	.014		
19 将来のため、しっかり勉強してほしい	.227	-.015	.748	.217		
17 安定した職業についてほしい	.286	.302	.572	.004		
『家族への気持ち』 α=.773						
9 同胞と周りとの違いを感じたとしても、同胞と関わりを持ってほしい	.168	.190	-.152	.800	-	
12 同胞は大切な存在であると思っ	.201	-.035	.116	.736		
22 家族の絆は強い方だと思っ	.009	.233	.274	.658		
『主体的役割取得』						主体的役割取得+

第4因子は、「同胞は大切な存在であると思っ

「母親の役割期待」4因子を用いて、「きょうだいの

3) 母親(およびきょうだい)の主体的役割取得

4) 同胞やきょうだいの要因別役割期待認知得点の比較

人・二人以上)、③きょうだいの出生順位(上・下)に

①同胞の障がいの重複では、「家族への援助」のみ有

5) 役割期待認知尺度の因子得点比較

きょうだいの結果に有意差が得られた (F(5, 13)=

表3 同胞やきょうだいの要因別の役割期待認知得点の差

	同胞の障がいの重複による比較			きょうだいの人数による比較			きょうだいの出生順位による比較		
	単数(n=15) 平均値	複数(n=4) 平均値	t値	1人(n=7) 平均値	!人以上(n=12) 平均値	t値	兄弟(n=15) 平均値	姉妹(n=4) 平均値	t値
役割期待認知(全体)	3.60	3.74	-0.41	3.61	3.64	-0.09	3.52	4.04	1.71
“人間性” 役割期待認知	4.20	4.71	-1.58	4.17	4.39	-0.78	4.31	4.29	0.06
“家族への援助” 役割期待認知	3.18	2.33	2.353*	3.14	2.92	0.66	2.88	3.46	1.49
“進路・就職” 役割期待認知	2.95	3.25	-0.59	3.14	2.94	0.47	2.75	4.00	2.991**
“家族への気持ち” 役割期待認知	4.22	4.45	-0.63	4.14	4.36	-0.58	4.22	4.50	0.32
“主体的役割取得” 役割期待認知	3.65	3.91	-0.66	3.52	3.81	-0.72	3.60	4.09	1.31

*p<.05 **p<.01

表4 きょうだいおよび母親の役割期待認知における因子得点の比較

	人間性	家族への援助	進路・就職	家族への気持ち	主体的役割取得	F値	多重比較
	平均 (SD)						
きょうだいの役割期待認知 (n=19)	4.31 (0.14)	3.00 (0.16)	3.01 (0.21)	4.28 (0.18)	3.70 (0.16)	24.33***	人間性 > 家族への援助、進路・就職、主体的役割取得 家族への気持ち > 家族への援助、進路・就職、主体的役割取得 主体的役割取得 > 家族への援助、進路・就職
母親の役割期待 (n=34)	4.57 (0.08)	2.79 (0.14)	3.29 (0.16)	4.04 (0.15)	3.75 (0.12)	39.03***	人間性 > 家族への援助、進路・就職、家族への気持ち、主体的役割取得 家族への気持ち > 家族への援助、進路・就職 主体的役割取得 > 家族への援助、進路・就職

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

への援助」「進路・就職」「主体的役割取得」に比べ、「家族への気持ち」が「家族への援助」「進路・就職」「主体的役割取得」に比べ、「主体的役割取得」が「家族への援助」「進路・就職」に比べ、5%水準で有意に高いことが示された。

母親も有意差が得られた ($F(5, 28) = 39.03, p < .01$)。多重比較の結果、「人間性」が「家族への援助」「進路・就職」「家族への気持ち」「主体的役割取得」に比べ、「家族への気持ち」が「家族への援助」「進路・就職」に比べ、「主体的役割取得」が「家族への援助」「進路・就職」に比べ、5%水準で有意に高いことが示された。

6) 親子の組み合わせによる分析 親子のペアリングを行い、3種類の分析を行った。①母親の役割期待の高さによる「きょうだいの役割期待」の比較、②親子の役割認知のズレの程度による比較、③親子の役割認知の差が大きな質問項目の抽出である。結果を表5に示す。

まず、①母親の役割期待の高さによるきょうだいの役割期待認知の比較を行った。母親の役割期待得点が平均よりも高い群(期待高群)と低い群(期待低群)に分け、期待の高さ(高群・低群)によるt検定を行った。結果、2群間に差は認められなかった。

②親子の役割認知のズレの程度による比較を行うため、19組を対象に、親の役割期待得点からきょうだいの役割期待認知得点を引いた値を算出した(以下、親子認

知差得点)。親子認知差得点を元に、きょうだいにより大きく役割期待を認知している群(きょうだい高群)と、母親がよりきょうだいに対して役割期待をしている群(母親高群)の二群に分けた。二群を比較するため、きょうだいと母親それぞれの役割期待認知得点を従属変数としてt検定を行った。きょうだいが従属変数の場合、「役割期待認知」の合計点が有意差傾向であり ($t(17) = 2.07, p < .10$)、きょうだい高群が母親高群より高い傾向であった。「人間性」と「進路・就職」は、5%水準で有意差がみられ(順に $t(17) = 2.227, t(17) = 2.428$)、きょうだい高群が母親高群よりも役割期待を認知していることが示された。

次に、母親が従属変数の場合、「役割期待認知」は有意であり ($t(17) = 3.088, p < .01$)、母親高群の方がきょうだい高群よりも母親自身の役割期待が高いことが示された。「家族への援助」と「主体的役割取得」は、1%水準で有意差がみとめられ(順に、 $t(17) = 2.76, t(17) = 3.01$)、母親高群がきょうだい高群よりも母親自身の役割期待が高いことが示された。「家族への気持ち」は、有意傾向にとどまり ($t(17) = 1.96, p < .10$)、きょうだい高群と母親高群において有意な差は認められなかった。

次に、③親子の役割認知の差が大きな質問項目の抽出を行った。質問項目別に親子認知差得点を算出し、親子間で3以上の差があった項目を抽出した。いずれかの親

表5 親子の役割期待認知のズレによる比較

	母親からの役割期待の高さ			親子の役割期待認知の差 (きょうだいの得点)			親子の役割期待認知の差 (母親の得点)		
	低い (n=10)	高い (n=9)	t値	子が高い (n=5)	親が高い (n=14)	t値	子が高い (n=5)	親が高い (n=14)	t値
	平均値	平均値		平均値	平均値		平均値	平均値	
役割期待認知 (全体)	3.61	3.66	0.21	4.05	3.48	2.071†	3.43	3.98	3.088**
人間性	4.47	4.13	1.26	4.77	4.14	2.227*	4.37	4.62	0.85
家族への援助	2.93	3.07	0.42	3.00	3.00	0.00	2.39	3.18	2.761*
進路・就職	2.83	3.22	1.00	3.75	2.75	2.428*	3.29	3.64	1.67
家族への気持ち	4.40	4.15	0.70	4.60	4.17	1.08	3.80	4.40	1.962†
主体的役割取得	3.58	3.85	0.86	4.13	3.55	1.68	3.45	4.13	3.013**

† p<.1 *p<.05 **p<.01

子において親子認知差得点に3以上の差があった項目を表2に示す。母親の役割期待が高い項目は“+”、きょうだいの役割期待が高い項目は“-”と表記している。

【考察】

同胞やきょうだいの要因別の役割期待認知得点の比較

障害の重複については、同胞の特性が複雑でないことがきょうだいの障がい理解を促し、母親を援助したいという気持ちにつながりやすいと考えられる。また、同胞の障がい種が複雑の場合、生活支援の利用や将来的な社会福祉施設への入所などの社会資源を利用する機会が多くなり、きょうだい自身が援助を行わなくてもよい場合があることが影響したと考えられる。

きょうだいの人数の違いは、きょうだいの役割期待認知に差を与える要因にはならない可能性が示唆された。きょうだい関係については、その構成によって自身への役割期待の認知が異なると考えられるため、単純な構成人数による群分けでは差異がなかったと推測される。

きょうだいの出生順位については、出生順位が下のきょうだいが「進路・就職」について母親からの役割期待を高く認知していた。本研究は18才以上のきょうだいに調査を依頼したため、出生順位が下のきょうだいには進路選択を行う年齢層に該当する人が多く含まれており、母親からの期待をより高く受け取っていたと考えられる。

役割期待認知尺度の因子得点比較 きょうだいも母親も「人間性」「家族への気持ち」を重視し、「家族への援助」を重視しないことが示された。「人間性」は、障がいの有無に関わらず期待の程度が高いと考えられる。「家族への気持ち」が重視されることは、家族にとって同胞の存在は大きく、様々な影響を受け、心理的サポートに対する意識が高まりやすいためだと考えられる。「家族への援助」が重要視されない点は、今回の対象が発達障がい・知的障がいの同胞を持つ家族であり、身体障がいのように実際の援助の必要性が低かったことが要因の一つだと考えられる。

なお、きょうだいは「人間性」と「家族への気持ち」の役割期待に差がないが、母親は「人間性」と「家族への気持ち」に有意差があり「人間性」の方を重視するという違いがあった。これより、きょうだいは母親が期待する以上に「家族への気持ち」を重視していると言え、きょうだいは母親の役割期待をより受け取りやすい可能性が示唆された。

親子組み合わせによる分析 ①母親の役割期待の高さによるきょうだいの期待認知の比較について考察する。先行研究より、親がきょうだいに「こうであってほしい」という役割期待をするため、きょうだいはその期待に悩み葛藤することが指摘されているが（大瀧, 2011、吉川, 2001）、本研究の結果より、母親の期待の高さによって

子の期待の受け取りが単純に高まるわけではないことが明らかとなった。なお、この結果は母親の役割期待の高さによる群分けであり、きょうだいと親をペアで捉えたものではない。親子双方の役割期待の受け取りのパターンに注目することが必要であり、この点は以下②の考察で述べる。

②親子の役割認知のズレによる比較について考察する。上記①では差がないが、親子の認知のズレに着目すると、母親の役割期待ときょうだいの期待認知には違いがあることが示された。きょうだいの役割認知得点が従属変数の場合、親が期待している以上に子が期待を受け取る群では、「人間性」「進路・就職」の期待を認知しやすいことが示された。障がい児・者のきょうだいの中でも“優れた行動をとるこども”は「自分がいかに良い子かを他者に見せつけ、ハンディキャップを持つ者と対極にいることを無意識的に強調する」と示されており（遠矢, 2009）、母親からの期待を過剰に受け取るきょうだいは、この特徴を有し、「人間性」が高くなりやすいと考えられる。また、「進路・職業」選択はきょうだいにとって未来への転換を求められる大きな出来事である（笠田, 2013）。きょうだいは「進路・就職」について親の役割期待を受け取りやすいと考えられ、本研究もこれを支持する結果となった。

一方、母親の役割期待得点を従属変数とした結果では、親子の期待の受け取りのズレによって、「役割期待全体」「家族への援助」「家族への気持ち」「主体的役割取得」の期待のかけ方に差があった。きょうだいとは異なり、母親は主体的役割取得も母親期待高群が有意に高い結果となっている。子以上に親の期待が高い場合、きょうだいに家族のことを道具的・心理的にサポートしてほしいという期待に加え、それらのサポートをすることがきょうだい自らの意志であってほしいという期待も持っていることが推測され、母親のアンビバレントな思いがうかがえる。

以上より、子が母親より期待を高く受け取る場合は「人間性」「進路・就職」の役割期待に注目し、母親が子より役割期待を高く求める場合は、これら以外の「家族への援助」「家族への気持ち」「主体的役割取得」に注目することが明らかとなった。この結果から、きょうだいの思う期待と母親の実際の期待にはズレがあり、きょうだいが期待に応えようと努力することが必ずしも母親の期待に沿うことにならない場面もあることがうかがえる。母親は、自分の期待とは異なる努力を行う我が子に悩み、きょうだいは自分の頑張りが母親に評価されないことで自己肯定感が低下することも起こりかねない。そのため、親子間の期待と期待認知のズレを認識することが、母親・きょうだい双方にとって心理的援助の一助となると考える。この点は、今後の障がい者家族支援に活かされる重要な示唆である。

③親子の役割認知の差が大きな質問項目について考察

する。結果より、親の期待が高い項目は「進路・就職」「主体的役割取得」、子の期待認知が高い項目は「家族への援助」「家族への気持ち」とサポートに関わる項目だった。上記②の結果と不一致な点があることから、項目ごとに親子間の特徴を検討するなどの取り組みも必要である。

今後の課題 これまでのきょうだい研究と同様、量的研究を行う際には、データ数を集めることが課題である。きょうだい自身へのアプローチのしにくさから、従来はきょうだい以外を対象に研究されることが多かった（大瀧, 2011）。しかし、当事者であるきょうだい自身を対象とすることが、研究を深めるために必要であろう。また、親子双方の役割期待認知を検討する際には、全体としての量的分析に加えて、親子の背景を踏まえた事例研究など質的検討を行うことも今後は求められる。

【付記】

この研究を行うにあたり、協力していただいた皆様に感謝します。

【引用文献】

- 阿部美穂子・神名昌子 2011 障害のある子どものきょうだいを育てる保護者の悩み事・困りごとに関する調査研究 富山大学人間発達科学部紀要 6 (1), 63-72.
- 阿部美穂子・神名昌子 2015 障害のある子どものきょうだいとその家族のための支援プログラムの開発に関する実践的研究 特殊教育学研究 52 (5), 349-358.
- 笠田舞 2013 知的障がい者のきょうだいのライフコース選択プロセス：中年期きょうだいにとって、葛藤の解決及び維持につながった理由 発達心理学研究 24 (3), 229-237.
- 金泉 志保美・木村 美沙紀・佐光 恵子・松崎 奈々子・高橋 珠実・相京 奈々子・新井 淑弘 2015 障害を持つ子どもときょうだいを育てる父親の思い 群馬大学教育実践研究 32, 55-63.
- 春日秀朗・宇都宮博 2011 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの期待に対する反応様式に注目して— 立命館人間科学研究 22, 45-55.
- 圓尾奈津美・玉村公二彦・郷間英世・武藤葉子 2010 軽度発達障害児・者のきょうだいとして生きる—気づきから青年期の語りを通して— 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 19, 87-94.
- 水内豊和・片岡美彩 2015 自閉症スペクトラム障害児・者のきょうだいの生涯発達の諸相（第1報）—きょうだいと同胞との関係の視点から— 富山大学人間発達科学部紀要 10 (1), 89-98.
- 水内豊和・片岡美彩 2015 自閉症スペクトラム障害児・者のきょうだいの生涯発達の諸相（第2報）—家族関係ならびにきょうだいの将来展望の視点から— 富山大学人間発達科学部紀要 10 (1), 99-109.
- Mchale, S. M & Gamble, W.C 1989 Siblings relationships of children with disabled and nondisabled brothers and sisters. *Developmental Psychology*, 25, 421-429.
- 三橋里歩・吉岡恒生 2014 障害児・者のきょうだいを対象としたピア支援の意義と有効性について—グループワークを通して— 愛知教育大学研究報告. 教育科学編 63, 29-37.
- 森川夏乃 2015 青年期きょうだい関係に関する家族心理学的研究 —親役割と子役割に着目して— 東北大学大学院教育学研究科臨床心理コース 博士論文
- 大瀧玲子 2011 発達障害児・者のきょうだいに関する研究の概観—きょうだいが担う役割の取得に注目して— 東京大学大学院教育学研究科紀要 51, 235-243.
- 小笠由加里・黒澤良輔 2014 知的障害者の同胞をもつ成人きょうだいの体験過程—きょうだい特有の課題への気づきに焦点を当てて— 徳島文理大学研究紀要 88, 11-16.
- サンドラ・ハリス著、遠矢浩一 2003 自閉症児の「きょうだい」のために お母さんへのアドバイス ナカニシヤ出版
- 谷川友子 (2008) 障がい者を同胞にもつきょうだいの家族観に関する研究 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要 (5), 7-15
- 遠矢浩一編著 2009 障がいをもつこどもの「きょうだい」を支える—お母さん・お父さんのために— ナカニシヤ出版
- 柳澤亜希子 2007 障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方 特殊教育学研究 45 (1), 13-23.
- 吉川かおり 2001 障害児の「きょうだい」を持つ当事者性—セルフヘルプグループの意義— 東洋大学社会学部紀要 39 (3), 105-118.